朱漆椀四口加レ盤、五月料、

〔江家次第二正月〕七日節會裝束

其饌物者中墨物也、以七寸朱漆垸盛菓子、

〔三省錄後編附錄軒の忍〕上むかし京都相國寺朱の膳椀を作られし記錄に、一人前に付五錢目づゝにて成といふ、○略下

〔茶道筌蹄五〕食器之部

利久まではことゞゝく朱椀なり、利休ゟ黑椀を用ゆ、朱も兼用、

〔四方のあか上〕遊女高尾朱椀記

此器や山谷わたりに名だゝる遊女、三浦屋のもと何がしとかや、最上氏に從良せし時、百の椀器をつくりて、玄たしきかぎりにわかちあたへしとなん、時うつり事さりて、原富の子香玉子の家藏となり、美人の形管にもかへざるべし、原富はむかしあし引の山の手に名だかき、三絃の妙手なり、

今も世に名のみ高尾の紅葉は朱椀朱をしき昔なりけり

〔日本永代藏三〕紙子身袋の破れ時

商賣ひだり前なる、吳服屋忠助とて、むかしは駿河の本町に、軒ならべし中にも、花菱の大紋に家名を玄らせ、○中略朱椀龍田のもみぢを散し、○中略其時節とはいひながら、亭主の心がけ惡敷が故なり、

〔狂歌東都花日千兩日本橋〕

夕日さす內朱の椀に黑江やのかゝす蒔繪のみつあしの膳　陽月舍

〔異制庭訓往來〕青漆光明朱椀